

私のモチーフ

風化により姿を変えゆく石仏

会員 永江咲紀子

風化により崩れかけた石仏を描き続けています。きっかけは、学生の頃、示現会展で山本吉雄先生の「風化」と題する磨崖仏の作品に出会い衝撃を受けた事でした。ナイフで力強く運んだ絵具の勢いが生命感に満ち、壊れかけた不動明王の姿を浮かび上がらせていました。それはレリーフの作品を見るようでした。その絵具の躍動感に釘付けになりました。私もこのような気持で描きたいと思いました。

それ以来、地元（戸田市）の寺の無縁仏に始まり、各地の様々な石仏を探しながら描いてきました。ここでは、何度も訪ね、描いて来たものを2ヶ所ご紹介します。

- 一、福島県、福島市信夫山
岩谷寺の磨崖仏群

福島市の街の北の外れに突然出現する信夫山の中腹に岩谷寺があります。その寺の境内まで登る山の斜面



▲ (写真) 福島 岩谷寺磨崖仏

には、江戸時代からの作と言われる100以上の仏像が山肌一面に磨崖仏群として彫られています。これらは、風化によりバツサリひびが入り、大きく欠けたものがほとんどです。幾つか顔の形の判るものもあり、実に美しい石仏群です。石質が軟らかく



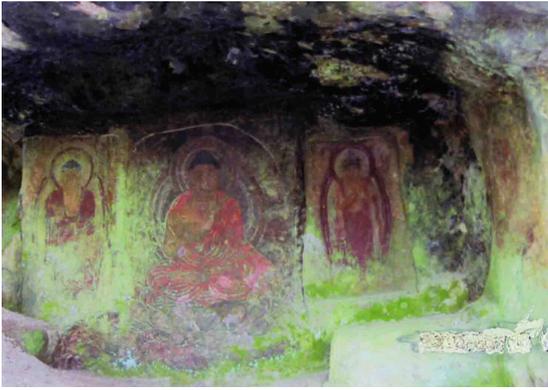
▶ 「岩は語る」(2008年)

色調が明るい上に、岩石の鉱物質が滲み出しているのでしょうか、様々な色彩が見とれます。

- 二、奈良県、春日山原始林にある
地獄谷石窟仏（奈良時代・不詳）

奈良公園の外れから続く、春日山原始林に柳生街道と呼ばれる古道があります。この石仏は、その古道を少し外れた所にあり、イノシシが出そうな、うっそうとした林の中にあ

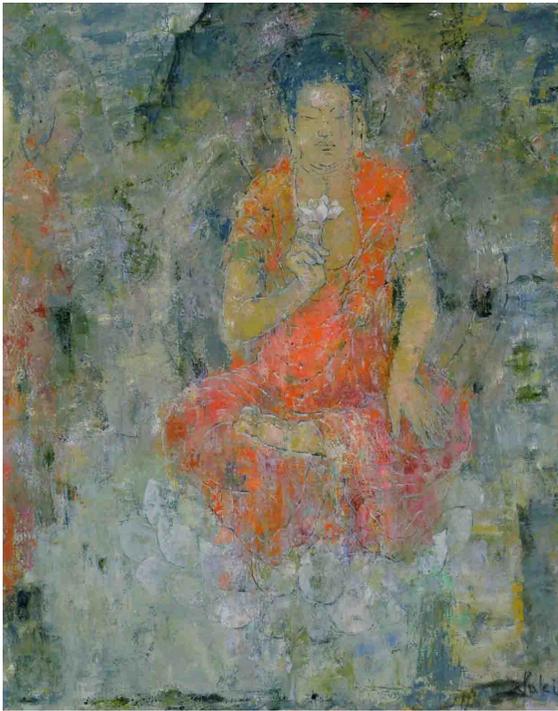
ります。石を切り出して出来たと思われる洞窟の壁面に線刻で彫られた仏像群です。三尊仏の他に見てとれるものは3体位でしょうか。（石の高さは1メートル半位です。）これは石仏としては珍しく壁画のような色彩が施されたもので、衣の朱色が目を引きます。表情や細部は消えかかり、明確な形はよく見て取れません。想像力で補いながら、元の形を考えます。幸い私は、15年来、地元（戸田市）の寺に写仏の会の下絵を納めさせて頂く仕事をして来ました。写仏用の絵は、墨と面相筆を使い細い線で描きます。この線の表現方法を、油彩の作品造りの中で生かす事ができるかもしれないと思い、線刻の線の表現に取り組み始めました。それまでのナイフや太い筆で大胆に描いて来た作業とは違い、細い線で描く事に新鮮な気持でした。大変緊張しました。石面の表現は、光沢を抑える為、胡粉を絵具に練り込み、ナイフで石としての壁を作ります。その上に細かい面相筆で線刻されているように描



▲ (写真) 奈良県 地獄谷石窟仏



▲ 「祈る」(2019年)



▲ 「悠久の祈り」(2016年)



▲ 「悠久の祈り」(2019年) 部分

きます。大変、集中力のいる作業でしたが、新しい世界を開いたような面白さがありました。

目の前にある風化した石仏が、いにしえに、どのような姿で人々の祈りを受けとめて来たのかと想像します。永い年月、風雨に晒されながら人々の心の声を聞き続け、砕け、削られてゆく。そのような石仏には深い感慨の念を抱かずにはいられません。いくら描いても描き切る事ができません。このような対象に出会えた事を大変幸せに思います。